（別紙様式４－Ｂ）

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

私は英語教員になるにあたり、生徒が能動的に授業に参加し、英語を使って力を伸ばせる教育の方法を学び、それを教育の場で実践するという目標を立て、一年間アメリカで勉強することに臨んだ。異文化での環境で日本の教育とは大きく異なる教育システムを実際に受けて学ぶことで、教育の行い方や学生の授業への取り組み方、文化の違いなど、数多くのことから日本の教育の可能性を学ぶことができた。私は、交換留学を通して経験したことを様々な側面から分析し、それらの学びを教員として還元していきたいと考えている。

第一に、教育者になるにあたりアメリカで教育を実際に一年間受けることで、私の教育観を広げることができた。その理由として挙げられることは、両国の救育における相違点から生まれる学生の授業への参加態度の違いの発見である。私がセントノーバート大学への留学を希望した理由の一つは、各授業で少人数教育を実践しているからであった。私がこの一年間で受講した八つの授業はすべて三十人以下、そして少ない場合には八人で形成され、二度目の授業では教授方は受講生全員の名前を把握しており、授業へ取り組みやすい雰囲気から整っていた。また、授業内でも教授方は一セクション終えるごとに質問を受け付ける時間を設け、不明な点があればすぐに挙手を受け付け、それを解消できる環境があった。日本の教育においては、周りの学生を気にしてしまうことで、不明な点を不明なままに終わらせてしまうことが多い。しかし、周りの学生が質問をすることで、新たな気づきや、考え方の違いから生まれる様々な意見の生み出し方を、私自身も得ることができた。また、学生の授業の取り組みの違いも大きいと感じた。各授業では小テストが頻繁に行われ、レポートやテストの数も日本の教育と比べて多かった。日本で教育を受けてきた中で、授業中に寝ていたり、期末試験だけに向けて勉強したりする学生を見てきたが、教育者側が学生の理解度を頻繁に確認することで、状況を把握し、各授業への取り組みを強化させていた。

授業では、コミュニケーション・メディア学の授業を多く受講した。その理由として、日本の大学では言語学や教育学を学んできた中で、教室内でのコミュニケーションが活発な授業形成の鍵を握ると感じたからである。教師と生徒が授業内で英語を活発に用いて双方向的な授業を行えるよう、私自身はもちろん、生徒のコミュニケーション能力を伸長させたいと考えていたからである。その中でも、春学期に受講した少人数コミュニケーションでは、授業内で私たち学生が実際に少人数に分けられて、グループ活動を行なっていくという実践的な授業が行われた。日本と異なり、授業内でもグループに分かれて話し合いを行う環境が多いアメリカで、グループコミュニケーションの取り方を学ぶことは、とても新鮮であり、私が実際に授業を行う中でグループ活動を促せるテクニックなどを多く学び、それを授業内で実践できる機会を多くいただいた。日本でのグループ活動内で起こる懸念として、メンバーの数人のみで話し合いが起きることである。その原因として、グループ の解体が早いということもあり、調和が図りづらいことが挙げられる。実際に授業内で一学期分グループを固定されたことにより、初対面のメンバーということもあり初めは気まずかったが、活動をこなすごとに皆が言いたいことを言える環境が形成されており、メンバーの参加度も高いものとなっていた。そのため、グループを中長期間固定させることによりグループ内での役割などを確立させ、皆の発言のしやすい雰囲気を作らせていきたいと考えている。

（別紙様式４－Ｂ）

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

八つの授業を受講した一年間であったが、学ぶ中で困難は多くあった。一つは、課題の量である。一週間に三時間同じ授業があった中で、そのたびに数十ページを超えるリーディングはもちろん、小さな課題であったり、小テストなどの勉強をしたりしなければいけなかった。宿題がほとんど課されない日本と比べて、リーディングをこなさなければ内容理解が間に合わなくなってしまうことが多くあった。そのため、授業の合間や夜の時間を活用してリーディングに多くの時間を費やしたのだが、一人で図書館に篭ることも多くなってしまった。また、言語の壁も大きな問題であった。予習をして授業に臨むことで大体の内容は把握しながら授業に参加することはできたのだが、授業内で完全に理解することは難しく、テスト勉強を重ねるにつれて理解を増していくということが多かった。しかし、その中で起きたことが、授業内でのディスカッションである。不完全な理解であったり、聞きなれない発音の人と会話をしたりするなかで、自分の意見がまとまらず何も言えない状況になってしまうことも多々あった。このように、日本で受ける教育との違いにより勉強に多くの時間が割かれる中、効率的に一日の時間を過ごしていくことなどを多く考えさせられた。

また、セントノーバート大学に日本語の授業が開かれている中で、私は日本語教育を行なっている教授のアシスタントを経験させていただいた。その中で、上級者向けの授業を受けている学生に文法を教えるという機会が多くあった。私自身、長期的に学生に言語を教えるという経験がなかったために、説明がしっかり伝わっているのか、私の説明は正しいのか、などと不安になる部分が多くあった。母語である日本語を教えるということもあり、私の中では理解しており説明できるだろうと考えていたが、理解していることと、効果的に教えることの違いに気づいた。そのため、英語を使っている中で、どのような状況でどのような言い回しや文法が使えるのかなどを頭に入れることで、改善を促していた。また、今回の交換留学終了後に、ミネソタ州にあるコンコルディア大学が主催する日本語教育サマーキャンプにスタッフとして参加することが決定している。サマーキャンプでは、日本の英語教育が英語で行われていることと同様に、日本語教育が日本語のみで行われるというイマージョン教育を実践している。その環境の中で、日本語教師スタッフとして参加し、外国語を外国語のみで教える教育法を活用する中で、どのような教え方や活動が生徒のモチベーションを損なわずに、そして効率的に学習を促すことができるかを学び、それを英語教育に生かしたいと考えている。

セントノーバート大学は異文化交流に力をいれているということもあり、様々な国から学生が集まり、共に学んでいる。その中でも、私は同じ交換留学生として、スペイン人の学生とルームメイトになった。部屋に区切りはないため、アパートのシェアと同様で、外国人と部屋を長期間シェアするのは初めての経験であった。初対面の相手であったり、異文化であったりと、何も知らない中で過ごし

ていくことは簡単ではなかった。私の性格上、直接的に物事を言うことが苦手ということもあり、初めの頃は改善して欲しい点を我慢するということが多くあった。また、どの行動が文化的な違いから起きているのかを把握することも難しかったが、直接的なコミュニケーションを通し、文化の違いを把握することができるということの大切さを知った。また、それらの違いを認識することは新たな発見でもあり、面白くも感じた。

また、私は一ヶ月ほどの冬休み期間を利用して、アメリカ国内、そしてカナダを広く観光した。初めの二週間ほどはカリフォルニアに住む友人宅に泊めさせてもらい、ツアーなどに参加することで、西海岸の観光地を回った。マイナス二十度ほどのウィスコンシンと比べ、十二月であってもカリフォルニアは十度以上であったということもあり、同じ国内であってもそれぞれの特色が感じられた。その次には、アムトラックというアメリカ国内を走る電車に乗り、三日間かけてカリフォルニアからニューヨークまでアメリカの一人横断旅を始めた。道中では車内から降りて観光するということができない点は残念であったが、 土地柄の移り変わりを見ることができた。そして、ニューヨークやボストン、トロントを訪れ、各地でツアーなどを用いて、様々な名所を訪れた。インターナショナルホステルを利用したのだが、観光地を回ったということもあり、世界中のバックパッカーなどとも出会うことができた。小さな島国である日本の各地にそれぞれの特色があるように、ウィスコンシン州だけでなく、様々な州を訪れ、歴史や観光地を見て回ることで、それぞれの地の歴史や人柄などを学んだ。私の目で見てきたことを生徒に伝えることで、ありのままの経験で生徒の関心を引いていきたいと考えている。

英語教員になるにあたり、異文化の混ざり合うアメリカで学びは、私の教育観を大きく広げ、また、日本の英語教育の伸長の可能性に気づかせてくれた。学校教育を日本で受けてきたということで、他国の教育を知ることは、自国の教育との比較に繋がり、取り入れていきたい点も多く見つかった。今回のアメリカ留学での教育への気づきだけでなく、世界に教育にも目を向けて行くことで、グローバル社会に合わせた人材を育成していけるような教え方をしていきたいと考える。また、教育の面以外でも、様々な文化に触れることができたのはアメリカだからこその経験であったと思う。日本で生活して行く中では多様性を感じることのできる機会はあまり多くなかった中で、ルームシェアから全てを異文化に身を置き、その違いを試行錯誤しながら生活できたことで学べたことは貴重な経験であった。生徒の多くが海外に身を置き、生活をするという機会は中等教育の時点では多くはないため、私の経験を元に文化の面からも興味を引くことで、英語の力も伸ばしていきたいと考えている。